

認知症の利用者を抱える 3世代同居世帯への支援を考える

●事例提出者

Rさん (居宅介護支援事業所・
介護福祉士)

R

●クライアント

Aさん・89歳・女性・要介護3

A

◆提出理由

認知症の本人を介護している家族が、毎夕の徘徊や怒鳴り声等の周辺症状に耐え切れず、大きなストレスを感じている。本人、家族にとって少しでもストレスの少ない生活を実現したいと思っているが、本人や介護者との面接がうまくもてず、信頼関係をつくることに苦慮しているため。

◆事例の概要

クライアントは要介護3の女性。平成17年にアルツハイマー型認知症の診断を受ける。同居家族は長男の妻(60歳)と孫夫婦(夫30歳、妻26歳)の4人暮らし。長男は平成18年に死去。次男、長女はともに同市内に在住。次女は他県に在住。

長男の死去後、クライアントは以前にも増して感情の起伏が激しくなり、怒ったり泣いたりすることが増え、徘徊も出現。長男の死を受け入れら

れず、不安と混乱のただなかにいる模様。長男の妻に対しては冷たく当たり、長年の嫁姑の関係もあり、長男の妻の負担は大きい。

長男の妻は月に1回でも負担軽減のためショートステイを利用したい意向をもっている。同居の孫息子は協力的であるが、母親(長男の妻)の対応に批判的で、「(クライアントを)怒ってはダメ。自分の性格を直せ」と言っている。ショートステイの利用も、利用後のクライアントの混乱を心配し、賛成しかねている。

◆紹介経路

平成19年6月、前任者の退職にともない引継ぐ。クライアントは平成17年から週2回デイサービスを利用している。

◆クライアントのプロフィール

3人きょうだいの長女として、同県内で出生。嫁いではからは仕事に出かけたことはなく、専業主婦として4人の子どもを育てた。

◆初回面接

初回の自宅での面接は、前任のケアマネジャーと同行訪問をした。本人は自分の生活空間に突然知らない人間が入ってきたことによる不安と不快な感情から混乱をきたし、面接中も攻撃的な言動がしばらく続いた。しかし、時間の経過とともに少しずつ落ち着きを取り戻していった。

「これまで元気で、体調もよく、病院に行ったこ

とがない」と、何回も繰り返し話されることから、健康で家庭をしっかり支えてきたことが自分自身の大きな支えになっていることが伺えた。

しかし面接後、家族にしかわからない本人の様子や対応の難しさからくる長男の妻のストレスについて、十分に聞き取りができたのかどうか不安が残った。

◆その後の援助経過

初回訪問後、毎月のモニタリング面接は本人がデイサービスから帰ったところに合わせ、なるべく本人・家族双方に負担がかからないようにしてきた。長男の妻からは、本人の精神状態の悪化について毎回話をされると同時に、ショートステイ利用の意向も伺う。しかし、本人の激しい気性と人見知りや認知症の進行により、たとえ1泊でも利用することは困難ではないかと、利用に踏み切れずにいた。今までは、用事がある時やしんどい時は市内の長女宅に預かってもらっていたが、前回頼んだ時はその長女宅でも大変な様子であったとのこと。

一方、同居している孫息子は、母親（長男の妻）がクライアントに対して厳しく接することがあることに批判的で、「（長男の妻の）性格を変えてほしい」とまで言うとのこと。長男の妻としては、夫との死別後、自分も精一杯介護していること、

長年の嫁姑の関係もあると反論したようだが、孫は自分の意見を曲げない様子。

長男の妻としては、介護する気持ちも限界であること、また今後のことも考え、今まで迷っていたショートステイを利用したい意向は固い。孫はショート利用後の本人の混乱を心配し、利用には消極的だったが、母親（長男の妻）の様子を見るなかで徐々に利用に向けて気持ちに変化していき、ショートステイ先を探すこととなった。

◆関係機関からの情報

デイサービスでは特定の利用者と常時一緒に過ごしておられ、この利用者の存在が毎回の利用につながっている模様。アクティビティの参加や入浴もできており、特に問題に感じられる行動はないとのこと。

◆考察

自宅での面接が十分に行えないのであれば、デイサービス利用中にもっと積極的にかかわるなど、信頼関係をつくるための努力が不足していたと反省している。現在、長男の妻がほぼ一人で抱え込んでいる悩みや負担を理解・共感し、今後の在宅生活を継続できるよう、一緒に検討していくことが重要だと考えている。今後は一回一回の面接を大切に、関係づくりに努めていきたい。

ケース検討会

ケースの全体像をつかむ

<見立て編>

野中 ありがとうございます。ひととおり事例の説明をしていただきました。まだよく見えないところが多いと思いますので、質問によって情報を補足していきたいと思います。まずは、<見立て>に必要な情報を、聞き手の主観を交えずに聞いていってください。その後、援助の<手立て>

を考えていきましょう。最初に確認しておきたいのですが、ショートステイは利用することになったのですね。

Rさん はい。来週、2泊3日で利用することになりました。

野中 では、今日の事例検討会は、ショート利用後の支援に向けての仕切り直しのしかたを考えるチャンスとして使えるわけですね。

Rさん はい。よろしくお願ひします。

本人のADLについて

野中 では、質問をどうぞ。

発言 ADLをもう少し教えてください。

Rさん アルツハイマー型認知症という以外は、特に大きな疾患はありません。食事も問題なく、自分で食べられます。排泄も自分で行かれますが、時々下着が汚れることがあって、それを押し入れなどに隠していることがあります。長男の妻が気づいて片付けるのですが、それが長男の妻の負担になっています。

野中 「時々」というのは、具体的にはどれくらいの頻度ですか？

Rさん 1週間に2回くらいです。

野中 事例検討をしていると、「時々」とか「頻繁に」「少し」「わりと」「よく」「近く」「遠く」といった表現が使われることが多いのですが、「時々」といっても人によって受ける感覚は違いますから、回数や距離、時間などの数字に関することは、極力具体的に伝えることが大切です。

Rさん わかりました。

発言 洗濯や整容などの面はいかがですか？

Rさん 洗濯は長男の妻がしています。洗顔は長男の妻が声かけをして、ご自分でされています。歯は総入れ歯です。

発言 食事は誰がつくっているのですか？

Rさん 長男の妻がつくっています。たいていは、ご本人と二人で召し上がっています。

感情の起伏について

発言 感情の起伏が激しくなっているということでしたが、何かパターンはあるのですか？

Rさん 長男の妻が指示的な言葉が使われると、感情を荒げることが多いそうです。以前は長男の妻がサイフを盗ったとか、薬を飲ませようとすると「毒を飲まされる!」、息子さんが亡くなった

時には「息子を殺した女だ。気をつけなさい」と周囲に言っていたこともあるようです。

発言 長男の妻の指示的な言葉というのは？

Rさん 「こういうことをしてはいけませんよ」とか「〇〇はしないでくださいね」といった、何かの行為を禁止するような指示です。

野中 もう少し具体的に、どんな指示を本人が嫌がるのかはわかりますか。

Rさん 具体的な内容まではつかめていません。

発言 感情の起伏というのは、どんなことが起こるのですか？

Rさん 大声で叫んだり、ものを投げたりです。

野中 何を投げるのですか？

Rさん 何を投げるかまでは聞いていません。

野中 ティッシュの箱を投げるのとナイフを投げるのとは、対策が全然違ってきますからね。どんな時に、どんなものを、どこに向かって投げるのか、そういった具体的な情報を押さえておかないと、効果的な対策は立てられません。

Rさん はい、わかりました。

野中 それで、どうやってその荒れた状況はおさまるのですか？

Rさん ご本人が落ち着くまで、長男の妻がその場を離れます。

野中 それで落ち着くのですか？

Rさん はい。

野中 荒れる頻度は？

Rさん ほぼ毎日です。

野中 毎日ですか、それはちょっとつらいですね。荒れるようになったのは、いつからですか？

Rさん 1年半ほど前に長男が亡くなられてから特にひどくなりました。

野中 長男は病気で亡くなったのですか？

Rさん はい。脳疾患です。

野中 急激な死ですか？

Rさん いいえ、何か月かは入院期間があったようです。

野中 そうすると、おばあちゃんは息子が亡くなっていく過程を見ているわけですね？

Rさん はい。お見舞いにも行かれていました。でも、まだ息子さんの死を受け入れられていないように感じます。

認知症の症状について

発言 ご本人の認知症の発症はいつですか？

Rさん 2年半ほど前にアルツハイマーと診断されています。

発言 どういう経緯で診断を受けることになったのですか？

Rさん 物忘れが激しくなったりしたこともあって、家族が心配して近所のかかりつけの開業医の先生に相談したところ、要介護認定を受けてはどうかとすすめられ、それで県立病院を受診し、アルツハイマーと診断されたそうです。

野中 その時、ご本人は何歳ですか？

Rさん 87歳でした。

発言 徘徊が以前よりも激しくなっているということですが、どんな状況なのですか？

Rさん 15年ほど前に市内で転居をしているのですが、どうも前の家に戻ろうとしているようで、「帰りたい、帰りたい」と言って外に出て行かれます。以前は夕方だけだったのですが、ここ数カ月は昼間も出て行くようになりました。

野中 出かける方向は合っているのですか？

Rさん はい、方向は合っていますが、とても歩ける距離ではないので、長男の妻がそのつど付き添ってしばらく歩いてから、「やっぱりないでしょう」と納得させて帰ってきます。

野中 それでおさまるのですか？

Rさん はい。その日はそれでおさまります。

野中 徘徊への対応パターンはできているわけですね。本人と会話は成立するのですか？

Rさん はい、大丈夫です。

発言 デイサービスでは特定の利用者と一緒に過ごしていらっしゃるということですが、どのようなシチュエーションなのでしょう？

Rさん ほかの利用者の方と少し離れた場所で、特定の方とお話をしておられます。

野中 その相手は女性ですか？

Rさん そうです。

野中 どんな話をしているのですか？

Rさん 内容はわかりません。表情からは落ち着いた感じを受けますし、時々は笑い声をたてたりして、とてもリラックスした様子です。

野中 どんな話をしてるか聞かないのですか？

Rさん あんまり楽しそうなので、声をかけて邪魔しても、と思ってつい遠慮してしまっ……。

野中 その気持ちはわかります。でも、この方がそれだけ落ち着いて、笑い声をたてるほど楽しんで話をしているというのは、とても貴重な時間ですよ。そういう時にどんな話をしているのか、気になりませんか？

Rさん とても気になります。

野中 だったら、聞かせてもらいましょう。認知症の方と一度じっくり話をするといいと思いますよ。機嫌のいい時にゆっくり話をすると、とても認知症とは思えないくらいしっかりした話をしてくれます。でも、ふとした瞬間に「このあいだ初潮があつて」と言い始める（笑）。そういう認知症のおもしろさを知らないまま事例が終わってしまうのはもったいないですよ。

Rさん はい、わかりました。

インフォーマルな資源について

発言 長男の妻はどんなタイプの方ですか？

Rさん ハキハキした方です。まめに動いて、自分の意見もハッキリ言うタイプです。ちょっと短気なところもありますが（笑）。

野中 仕事は何かしているのですか？

Rさん ご主人が亡くなるまでは働いていらしたようですが、今はしてられません。

野中 何の仕事をしていたのですか？

Rさん そこまでは聞いていません。

野中 経済的には余裕はあるのですか？

Rさん 暮らしぶりを拝見すると、金銭的には困っておられないようです。3階建てでかなり大きなお宅で、庭も立派です。

野中 どうして余裕があるのでしょうか。

Rさん ハッキリした理由はわかりません。

発言 亡くなった長男のお仕事は？

Rさん 長男の仕事……聞いていません。

発言 一緒に住んでいらっしゃるお孫さん夫婦はご本人の介護にはタッチしていないのですか？

Rさん お孫さん夫婦は共働きということもあって、介護は長男の妻が一人で担っている状況です。ただ、お孫さんはおばあちゃんのことを心配はしておられて、おばあちゃんを叱るお母さん(長男の妻)に対して批判的なことをおっしゃることがよくあるようです。

野中 孫夫婦はどんな仕事をしているのですか？

Rさん ……聞いていません。

野中 経済的基盤がどうなっているのかや、同居している孫夫婦がどんな仕事をしているのかといった情報は、介護保険サービスにつなげることだけを仕事と考えれば、ケアマネジャーの業務と関係がないように思えるかもしれません。しかし、この人がどんな生活環境のなかで暮らしているのかを知らなければ、本当に適切な支援はできないのです。ケアマネジャーのアセスメントは、少なくともそのくらいの広がりが必要です。

Rさん はい。今後は気をつけます。

発言 デイサービスのほかにご本人が出かけるところはないのですか？

Rさん 以前は近所の方のところへお茶飲みに行かれていたそうですが、最近はそういうこともないようです。

野中 どうしてなくなったのですか？

Rさん 理由は聞いていません。

野中 本人にとって、そのお茶飲みは数少ない外出機会ですし、家族以外の人とふれあう貴重な場だったはずですよ。それがなくなったというのは、大きな出来事ではないですか？

Rさん たしかに……。

野中 援助者はそういう変化に敏感にならないとダメですよ。

Rさん わかりました。

発言 デイサービスとご自宅の往復以外に外出することはないのでですか？

Rさん たまに長女さんのところに泊まりに行かれます。

野中 たまに、とは？

Rさん すみません。半年に1回くらい、長男の妻がちょっとしんどいなと思った時にお願ひしているようです。

発言 何泊くらいされるのですか？

Rさん たいていは1泊で帰ってくるようです。

野中 長女はどこに住んでいるのですか？

Rさん 同じ市内です。車で15分くらい離れたところにお住まいです。

野中 長女の家家族構成は？

Rさん すみません、そのあたりの情報はもっていません。

野中 実は障害者を抱えててんやわんやしている家かもしれないし、あるいは長女の夫が市議員で認知症についてもすごく関心の高い人かもしれない。目の前に有効な社会資源があったとしても、その情報を知らなければ使うことはできません。すばらしい宝物があってもふれられないんですよ。ケアマネジャーは社会資源に関する情報にはどん欲にならなければいけません。

Rさん はい——。

発言 次女さんは県外に住んでいらっしゃるということですが、介護にかかわるのは難しいのでし

ようか？

Rさん そうですね。飛行機で行かなければいけないような遠隔地にお住まいなので、直接的な支援の担い手になるのは難しいです。ただ、きょうだい仲はよいようなので、必要な情報は共有されていると思います。

発言 次男さんが長男の妻の相談相手になっているようですが、どこに住んでいるのですか？

Rさん 次男は車で5分くらいのところに住んでおられます。

野中 何歳で、どんな仕事をしているのですか？

Rさん すみません。把握していません。

野中 もったいない話ですね。医者をやってるかもしれないし、もしかするとソーシャルワーカーかもしれない。もっと聞かないと。

Rさん はい……。

野中 何度も繰り返しますが、「一丁上がり」の仕事だけをしていると、厚労省はどんどん単価を下げてきますよ。何よりも、自分が支援をしている利用者に興味をもつことが大切です。あなたがどんな支援をするかで、この人たちの人生は大きく変わります。それだけ重要な仕事をしているのですよ。そこを十分自覚してくださいね。

Rさん はい、わかりました。

具体的な対応策を考える

<手立て編>

野中 まだ十分に見えていないところもありますが、時間の関係もありますので、このあたりでプランニングに移りましょう。プランニングの際には、総論ではなく、誰が・いつ・何をするのか、できるだけ具体的な案を出してください。90歳の認知症のおばあちゃんにご主人に先立たれた60歳の嫁、そして30歳の若夫婦の3世代同居世帯をこれからどう支えていけばいいのか。具体的なアイデアを出してあげてください。

本人の希望、状態の把握

発言 私はまず、これからの生活に対してご本人がどんな希望をもっていられるのかを知りたいな、と思いました。

野中 そのためにはどうしますか？

発言 コミュニケーションはとれるということなので、ご本人とお話をしたいと思います。

野中 大事な点ですね。生活に対する希望とか、もしくは死ぬ前にこれだけはやっておきたいということがあるのか、そういった話をご本人とじっくりして、これからの生活目標を立てるということですね。この方ならば、ゆっくりタイミングを合わせれば相当のコミュニケーションができるのではないですか？

Rさん はい、そう思います。

発言 感情の起伏がどういう時に起こるのか、どんな指示をされると嫌がるのか、パターンを把握したいと思いました。

発言 気持ちが荒れた時に何を投げ捨てるのか、ティッシュの箱なのか、ナイフなのかもアセスメントしたいです（笑）。

野中 まじめな話、どちらも大切な点です。

長男の妻への支援

発言 私はお話を聞いていて、長男の妻のストレスが高いなあ、と思いました。嫁に入った家で夫を亡くしたあと、義理のお母さんの介護をほとんど一人でしているわけですし、それなのに実の息子からはやいのやいの攻められる。義理の弟さんや妹さんのヘルプはあるものの、ちょっとストレス度が高いような気がしました。ですので、ケアマネの援助対象者であるおばあちゃんに対してよりよい支援を提供していくためにも、彼女のストレスが軽くなるような方法を考えてもいいのではないかと思います。

野中 具体的にはどうしますか？

発言 まずはお話をじっくり聞くことではないでしょうか。嫁姑の关系到まつわる話もありそうですし、ご主人を亡くされたあとのグリーフワークがうまくできているのかどうかも気になります。お話をじっくり聞く姿勢をこちらがもつだけで、かなりストレスが軽減されるのではないかな、と思いました。

野中 とても大切なポイントですね。1回きちんと長男の妻の話を聞く。この人が体の中にため込んでいる大変さをじっくりと聞いて、受け取ってみることが大事です。

Rさん わかりました。

発言 同じような立場の方とお話をするのも介護ストレスの軽減には役に立つと思います。たとえば「認知症の人と家族の会」をご紹介するとか。

Rさん 実はつい先日、ご案内の資料をお渡ししたばかりです。もし、お一人でいらっしゃるのが不安であれば、私も同行させていただきます、とお伝えしています。

野中 なるほど。一步前進ですね。

発言 長男の妻はご本人の介護に苦勞をしていらっしゃるから、どちらかというとな本人に対してネガティブな印象をもっていると思うんです。たとえば、デイサービスで仲の良い方と楽しそうにしているご本人の様子を長男の妻にご報告してもいいのではないかと思います。

野中 どうですか、今のアイデアは？

Rさん とても参考になります。先ほど先生がおっしゃっていたように、デイサービスで楽しそうにいらっしゃる時にどんな話をしているのかをうかがえば、長男の妻が自宅でご本人と接する時のヒントになるかな、と思いました。

野中 本人の明るい側面を知るのは、長男の妻にとっても介護生活の励みになるでしょうからね。たとえば、長男の妻をデイサービスの見学に誘って、本人が楽しそうにしている様子を直接見ても

らうという方法は考えられませんか？

Rさん なるほど——。そこまで考えが及びませんでした。それは実現可能です。

一家全体をとらえる視点

発言 私は奥さんのこともさることながら、お孫さんのことも気になりました。もしかするとお孫さんは認知症のことについてあまりご存じではないのではないのでしょうか。お孫さんも「家族の会」に行かれるといいような気がしました。

野中 それはいいアイデアですね。

発言 お孫さんについてはここまであまり話が出てきませんでしたが、このお宅の実質的な跡継ぎですし、今後のこのご一家のことを考えると、とても重要な存在なのではないかと思います。

野中 大事な着眼点です。ケアマネジャーの直接の支援対象者は90歳のおばあちゃんですが、そのおばあちゃんを介護している60歳のお嫁さんも視野に入れる必要がある。しかし、実はその下の世代がこれからこの家を切り盛りしていくわけですから、3世代のニーズをどうとらえて満たしていくかが、この事例のポイントでしょう。

発言 世代の交代、あるいは承継という点では、相続などの問題もあるのではないかと思いますので——。

野中 そういう問題も当然起きてきますよね。家や土地の名義がどうなっているかなどは、今の段階では把握していないと思いますが、これから関係を築いていくなかでは、そういう点も視野に入れておくことが大切です。

Rさん はい、わかりました。

野中 孫とは話をしたことはあるのですか？

Rさん 何回かはありますが、ご挨拶程度です。

野中 もっと膝詰めで、深く話をしたいですね。なぜあなたはお母さんの性格を変えなければいけないと思っているのか、どんな期待をあなたはし

ているのか、おばあちゃんの状態がよくなると思
っているのか、といったことを。なんとんでも、
これからこの一家の中心になっていくのはこの孫
息子ですから。

Rさん はい。そういう意味では、ご本人ともそ
うですし、長男の妻やお孫さん夫婦ともお話をす
る時間が絶対的に足りなかったと思います。

他の支援者との連携

発言 貴重な外出機会であったお茶飲みがなぜな
くなったのか、これからそういった場をつくるこ
とはできないかを考えたいと思いました。

野中 家族以外のインフォーマルな資源の調査で
すね。大事な点です。

発言 私は認知症の周辺症状に医療面からアプ
ローチする余地はないのかを知りたいと思いま
した。長男の妻の対応や孫の理解ももちろん重要だ
と思いますが――。

野中 主治医から薬は出ているんですよね。

Rさん 今は薬は何も飲んでいません。アルツハ
イマーの診断を受けた後は、特に病院には行かれ

ていないようです。

野中 そういう意味では、認知症の専門家にきち
んとつながっていないケースなんですね。こうい
う中等度の人だったら、今はいい薬があるんで
す。それを使えるのか使えないのかを判断するた
めにも、認知症をきちんとわかっている医者につ
なげる作業が不可欠です。

Rさん わかりました。同僚などに聞いて、適切
な医療機関につなげていきたいと思います。

野中 これまでに出てきたアイデアをまとめると
表のようになりますかね。では最後に、今日の感
想をどうぞ。

Rさん 今日はいかに自分が情報を把握できてい
なかったかを痛感しました。まずはご本人ときち
んと向き合ってお話し、またご本人を支えてい
るご家族の方――長男の妻やお孫さん夫婦、次男
さんや長女さんともコミュニケーションをきっか
りとして、これから先の生活をどう組み立ててい
くのかを一緒に考えていきたいと思います。今日
は援助を仕切り直すよい機会となりました。本当
にありがとうございました。

